

私の立見席

阿部文明



私の立見席

阿部文明

あ べ ふみ あき
阿 部 文 明

1924年徳島県麻植郡に生まれる。
日本共産党徳島県委員会文化部長。
徳島県文化団体連絡会議副会長。
徳島ペンクラブ会員。
徳島健生協（健生病院）副理事長。
住所 徳島市末広4丁目8-13

私の立見席

昭和五十四年六月十日発行

著者 阿部 文明

発行所 鳩 書 房

印刷 松下 印刷

目 次

冴えた写真 53

阿波踊り寸考(一) 57

阿波踊り寸考(二) 60



詩六篇

岬にて 65

空にて 68

山里にて 71

山村にて 75

剣山登山道路にて 79

阿波の北方 82



森女 89

庭に小鳥を	9
コロの風景画	12
かいつぶり	14
季語一語	16
老優	19
屋大工の子	22
門下ということ	25
J君のこと	28
娘天国	32
私の鑑賞体験	35
利休の茶杓	38
割烹千花	43
舞踊「粉ひき節」	47

観劇通信 159

祖父の言葉 166

あとがき 176

吉祥天女像 95

玉三郎を見る 101

『霧の音』の周辺 107

文化の根っこ 114

原体験としての母 116

石田拓夫鑑賞 125

「とくしまの小説」 135



阿波おんな 143

政党車の哀歓 146

鳥かご 150

夏の或る日 151

遠望二つ 156

庭に小鳥を

歌人の近藤芳美さんから、「家の庭に小鳥を呼びなさいよ」とすすめられた。

暮らしのなかにリリシズムが必要だということから、近藤さんはそのことをいわれたように思う。

短歌のことで徳島へこられた折に、数人で近藤さんを囲んだ。写真の藤井梵さんなどジャンルのちがう人たちが相寄っていたから、話題もあつちこちして、約三時間の長い歓談になった。「庭に小鳥を」は、近藤さんから私たちへのその時の注文であつた。

その時、私は、物理学者の朝永振一郎博士のことを申しあげた。朝永博士も庭に小鳥を呼んでおられる。

「庭に作つたえさ台に冬は毎日りんごを半分おくことにした。そうすると、ひよどりやむくどり、おながなどがそれを食べにやってくる」

随筆集『庭にくる鳥』（みすず書房一九七六年）にその仔細が描かれている。

朝永博士の住む武蔵野市では、十年前には、季節になるとひばりが毎日やってきて空高く舞いあがり、さえずったそうである。三年ほど前までは、こじゅけいの親鳥が、数羽の小さなひなを連れて歩いている姿も見られた。「しかしそれが今では見られない」と朝永博士はいっておられる。

作家の庄野潤三にも、庭にりんごを置く話があつて、

「庭の椎の木の枝に、林檎を吊しておく。その林檎をひとところだけ、包丁を入れて、中の身が食べやすいようにしておく」

そうすると、ひよどりがやってくるのだそうである。『クロッカスの花』（冬樹社）という小文集に書いている。

いずれも心のやさしい、いい話である。

考えてみれば、私たちの毎日は、昼といわず夜といわず人工音で占められている。テレビやラジオから流れ出る美しい音楽もあるにはあるけれども、それも人工音である。

近藤さんのいわれるリリシズム、つまり叙情詩的なおもむきは、視覚と聴覚とのいずれにしろ、自然によってやしなわれ、また、よみがえってくる性質のものだと思う。聴覚でいえば、風、雨、雪の音もあり、川音や潮騒もあろう。だが、鳥のさえずりをのがすことはでき

ない。蝶やとんぼでは声がないし、犬や猫では用をなさない。

その鳥たちの姿を、近ごろは、地方の小都市でも見かけることが少なくなった。私は徳島市の東端に住み、東部から西部にかけてを日常の生活圏にしているが、騒音のせいなのだろうか、鳥の鳴く声を耳にすることは滅多にない。鳴く声が聞こえてこない、いないのも同然である。

いずれ私も、アパートの三階に住んでいるそのベランダに、りんごを置きたいと思う。

カラーの風景画

大晦日と正月を奈良で過して、すぐあと、二月下旬にふたたび奈良へ行った。正月は浄瑠璃寺、今度は室生寺と当麻寺を目当てにした。もうすぐ春のにすぐく寒い日であった。

この折、うまいぐあいに、奈良県立美術館で「ミレー・カラー・クールベ展」を鑑賞することができた。

展示作品は八十点余。あえていえばカラーの風景画に一番ところをひかれた。カラーのそれは「自然主義的風景画」といわれているもので、「詩的風景画」ともいわれている。

そのうちでもルーブル美術館蔵の「モルトフォンテーヌの想い出」が好きであった。生い茂る樹木が自然のふところの深さをたつぷりと感じさせる絵である。

柳亮著『近代絵画史』によると、それを、カラーの「緑色の階調」と呼ぶらしい。当時の風景画は俗に「焦げパン色」といわれ、褐色の階調にたよって制作されていた。そこへ緑色の階調を大胆にもちこんだのがカラーであった。

同行した妻もコロアが好きだという。妻も私も古い農村に育っているから、どうしても自然主義的で詩的な風景画に目がいくのかも知れない。

だが、コロアの絵にひかれるのは、そうした郷愁だけではないようにも思う。もっと人間に本来的な意識のなせるわざのようにも思うのである。

人間は、美しい自然なしには生きられない。その自然とは、何よりも樹木である。

詩人で作家の清岡卓行が、随筆集『サンザシの実』（毎日新聞社）のなかの「コロアの新しさ」でつぎのようにいつている。それは、杉本秀太郎という人が雑誌『ふらんす』にのせた「コロアの風景画」を短評ふうで紹介したものであるが、

「ここで語られているコロアの特徴が、いまさらのように新鮮に感じられるのは、言うまでもなく、私たちの樹木が環境によっていじめられているからである。

コロアの絵は、失われようとしているものが、じつは私たちの心の中にこそあるのを、叙情的に告げているのだ」

ミレーやクールベの絵もよかった。ただ、一番好きだったのはという一番を素直に言えば、コロアの風景画となるのである。

かいつぶり

私の実家の在所の氏神さんは、十二社はんと呼び、子供のころには江川の堤防の上にあつた。昔、大水で上から流れてきたものらしい。

その氏神さんから、江川を見おろして、よくこんな歌を唄った。

いっちょつぶり、こ（子）オつぶり

頭の上に糞（ふん）がある

いんで母（かあ）やんに洗（あろ）てもらえ

そうすると、川面に浮いていたいっちょつぶり（かいつぶり）は、きまつて水中にもぐるのであつた。

出てくると、また唄う。五羽も六羽ものかいつぶりが、唄うたびにそれを繰り返す。こちらのいいなりになるのが楽しくてならなかった。

十二社神社から百メートルほど西に、やはり堤防の上に、小さな祠（ほくら）があつた。